ひまわりからのメッセージ

５２号

2015.7.13

西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

玄鳥の巣

先日、墨俣小学校へ訪問した折に、目の前を、さっと燕が横切っていき、驚かされました。顔を上げると、つばめの巣が玄関の外灯の上にあって、ひなたちが一斉に啼きはじめました。親つばめは餌を求めて飛び立ったのでしょう。ひなたちは、これ以上伸びないと思える程に首を伸ばし、大きく口を開けて啼き続けます。その姿が何ともかわいく、しばらく見とれてしまいました。そして

のど赤き玄鳥（つばくらめ）ふたつ屋梁（はり）にいて
足乳根（たらちね）の母は死にたもうなり

という斎藤茂吉の短歌を思い出し、小さな燕のひなの命と死にゆく母の命を一首に詠みこんだ茂吉の心情を今更ながらに思いました。

そういえば、私の幼い頃には、どの家にも燕が巣作りをしていたものでしたが、今は、そういう家は殆どなくなってしまいました。学校でも鳥小屋があって、文鳥やセイセイインコがたくさんいましたし、うさぎ小屋もありました。子どもたちの周りから、だんだん生き物が少なくなって、触れる機会が減っていることに気づかされるこの頃です。

ゲームの世界の中では、一度死んだ命も魔法のように甦ってきますから、子どもたちの実体験の乏しさともあいまって、最近の命の軽視が進んでいるように私には思えるのです。いじめも虐待もおそらくは根っこのところでつながっているのでしょう。

墨俣小学校の子どもたちは、燕のひなが巣立つ日を心待ちにして、巣を見上げているのだと校長先生に伺いました。「一度巣立っていって今度は二度目なんですよ」とおっしゃる先生方も、日々巣を見上げていらっしゃるのでしょう。小さな命を見守っていくことで、子どもたちは大きな心の財産を作り上げていくのでしょうね。

途切れのない支援

サポートブックに残しておきたい記述

西濃園域では、子どもたちのサポートブックが広がってきていますが、それにつれて、様々な問題が浮かび上がってきているように思います。

(I) サポートブックは保護者が持つものです。

学校によっては、学校で預っておくものだと誤解されている所もあるようですが、必要と思われる事柄についてはコピーをして(保護者了解のもとに)別ファイルに㊙保管して保護者にサポートブック(スマイルブック、ないろブックなど名称は市町によってちがっています)は返してもらいましょう。

(II) どんな支援をひきついでいくのか?

本来、個別の指導計画や教育支援計画は保護者と共に作ることになっています。しかし、先生方の忙しさを目のあたりにすると、そういう時間を作っていただくことは、なかなか難しいように思います。

しかも、先生方はまじめな方が多いので、次の学年にひきつぐために、全ての教科についても書かなくてはならないし、完璧なものでなくてはならないと思っている方が多いように思います。

- サポートブックを持つ子が増えると、教師の負担が増えて大変です。
- 何を、どう書いていいのか困ります。
- サポートブックは発行しすぎではないですか?

こういう声が聞こえてきます。

でも、文科省は、どう言っていますか?「支援が必要な子は、通常学級の中で六・五パーセントいます。」けれども実際には、虐待やネグレクトの子まで含めると、二割位になるのではないか……と、LD学会で聞いたことがありました。学校に訪問すると、やはり支援の必要な子が多いことに気づきますから、サポートブックの発行

が多すぎるということはないと思います。むしろ、サポートブックを持っていないけれども明らかに困り感のあるお子さんがいて、今後が心配だなあと思うことも多々あり、保護者の方の理解をもっと広げていかないといけないと考えています。

では、サポートブックに今後の子どもたちの自立に向けて、どのような支援のひきつぎを記入していただけるといいか、私なりに考えてみました。

① 感覚について

幼児期に気になる触覚過敏は、成長するにつれて目立たなくなってくるかもしれません。けれど結婚、出産して母子の関係のところで困ることが起きる可能性もあるようですから、記述として残しておきたいものです。

距離感の取りにくさについても、具体的にどのように教えたか、記述しておきましょう。

聴覚過敏については、掃除機、エアータオルなど日常生活の中で怖がったもの、運動会のピストルや突然の大声など、どの様な支援がされてきたかも大事です。小さい女の子の甲高い泣き声などに反応してしまう子ちいますので、どんな音に不快を示したか、耳ふさぎなども記入しておきたいものです。

逆に聴覚的な鈍さについて、後からの呼びかけには反応しなかったり、休み時間のざわざわを嫌がるなど、わがままと思わず、必要な音やことばを選び出して聞きとることの苦手さとして考え、どの様な支援が必要だったのか、聞きのがしや聞き違いに対して注意喚起をどの様にしたかも記入してもらえるといいでしょう。

視覚支援については、特に重要です。

見通しをもちにくく、新しいことが苦手な子に個別的なスケジュール表の呈示とか、家庭であらかじめ体験させておくとか、具体的な支援方法が記入されていると助かります。

学習障がいの子には、板書写し、読字、書字など視機能と関係した困り感が多いと思われます。本人の努力不足だと決めつけずに、手元にメモを置く、板書の工夫、書字の空間の取り方など、家庭学習での工夫も含めて学校と家庭の協力関係ができていくといいと思います。

② 学習について

サポートブックに、各教科のことを細かに記入する必要は、私はないと思っています。それよりも、その子が、どのように情報を取り入れ、どの様な認知処理を得意としている子なのかという記述は残してほしいのです。

認知処理ということばは聞き慣れないことばかもしれませんが、子どもによっては、苦手なやり方を強要されることで、上手くできない自分をせめ、自己肯定感、有能感を下げてしまう子がいるのです。

ウェクスラー検査（ウィスクWISC）が広く知られるようになり、言語、非言語という刺激の感覚様式から、何の刺激を使うといいのかということがわかるようになってきました。つまり、ことばとして聴覚的な刺激を使った方がいいのか、目で見る視覚的な刺激の方が入りやすい子なのかということです。けれども、どういうやり方をするといいのかは、今まで十分にわからなかったのです。

ところが、神経心理学の発達によって、脳の認知処理には、大きく分けて二つの認知処理過程があるという提案がされてきました。それが「継次処理」と「同時処理」という考え方です。

＜継次処理方略＞

- 段階的な考え方
- 部分から全体へ
- 順序性の重視
- 聴覚的、言語的手がかり
- 時間的、分析的

＜同時処理方略＞

- 全体をふまえた教え方
- 全体から部分へ
- 関連性の重視
- 視覚的、運動的手がかり
- 空間的、統合的

私たちは、この二つの認知処理のやり方をうまく使い分けていて、二つの方略に得手不得手の差が余りありません。ところが、子どもたちの中には、その差が大きいために、とても困っている子がいるということがわかってきたのです。

例えば、漢字をおぼえる時、何度も何度もくり返し筆順を練習しても覚えられない子がいます。その子は、もしかしたら継次処理方略（やり方）は難しい子かもしれません。だったら、まず全体の形をとらえ、

部分に分けてみて、パズルのように分けてみてはどうだろう…と、工夫してみるわけです。

時計のよみ方も考えてみましょう。

継次処理では、目盛を進めながら「一時、二時……」というように目盛と音声を対応させて教えていきます。同時処理では、モデルとして示される時刻の時計と同じ絵カードを視覚的、空間的な手がかりをもとに集めさせ、次にモデルをなくして「○時はどれ？」と選び出させる……というやり方をしていきます。

通常学級の中では、継次処理で教えていかれることが多いでしょうが、その子の認知処理の方略を知ってもらって、家庭も協力したり、次の学年の担任の先生にも、それを引きついでおいてもらうことが大事だと思います。

先生の中には、私の教え方が絶対に正しいと思っていらっしゃる方もあるでしょうが、認知処理ということも先生方に知っておいていただく方が良いと思うのです。そうすれば、助かる子もたくさんいるはずですから……。そして、特別支援学級の担任の先生方には、より知っていただく必要があるでしょう。

③ 行動について

園から小学校、小学校から中学校への支援のひきつぎの中で集団での適応力ということが問題になっていることが多いと思います。けれども、引きつぎをしたにもかかわらず「サポートブックなんて読みません！」「先入観で見たくないのです！」と、保護者の方に常々と発言される先生がいらっしゃったということが、漏れ聞こえてきて、びっくりしたことがありました。それでは、トラブルが起きた時やパニックになった時、不適切な対応にならないとも限らないのではないかと心配にもなったのです。

トラブルで暴力や物をこわすということもあるでしょうし、パニックで本人もわけがわからなくなってしまうということもあるでしょう。

「いつ、どこで、どういう状況で誰に対してどんなことが起きたのか」そして、その子が自分の気持ちを落ちつかせるために、別の場所があった方がいいのかどうか、どういう対応をすると良かったのか、あるい

は、その対応は良くなかったのか、等々、行動の分析には欠かすことのできない記述です。

個別の力と集団での適応力は必ずしも一致しません。家庭では問題はないのに、学校ではどうしてそんなことが起きるのかということは、たくさんあると思います。社会の中で生きていく時、自分の好きなことだけやっていればいいという具合にはいきませんから、子ども自身がどのように自分の気持ちに向き合っていくのか、そこが大切なところです。そして、その支援も次へ手渡していきたいポイントです。

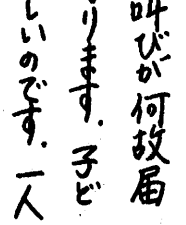
④ 性格や行動特性について

一番にならないと不安定になる、ていねいすぎることば使い、マイルールにこだわる、忘れものが多い、非常に多動である、チックがある、吃音がある等々気づいている本人のくせなどは、やはりサポートブックに記入して綴っておくといいでしょう。

又、爪かみや文房具などを常にいじっている、勝手な発言など叱ったり指摘したりすることで、かえって悪化したり二次的な障がいを引きおこしたりすることもあります。

サポートブックをもっていることで障がいと決めつけられては困りますが、まだまだ誤った認識も多いように感じます。子どもたちが大人になった時、自分がこんなに多くの人たちに支えられてきた大切な存在であるのだと思ってくれるようなブックであってほしいと思います。

先日もいじめを苦に自殺した中学二年のお子さんのニュースがありました。SOSの心の叫びが何故届かなかったのか・・・・虚しい気持ちになります。子どもたち皆が心豊かに幸せになってほしいのです。一人一人を大切に思い、支えていきたいと思うのです。そのためのサポートブックであってほしいと願っています。

支援センター親の会の八月例会は夏休みとさせていただきます

次回は九月十四日です。